

## 個人レポート

### 蒲生野贈答歌

大泉幸子

『萬葉集』巻一、雑歌の部には、額田王が大海人皇子と贈答したと伝えられる次の歌が載せられている。まず、本文と訓読文を挙げる。

〈本文〉

天皇遊獵蒲生野時額田王作歌

茜草指 武良前野逝 標野行 野守者不見哉 君之袖布流

(巻1・20)

皇太子答御歌

紫草能 尔苦久有者 人婦故尔 吾戀目八方(巻1・21)

紀曰天皇七年丁卯夏五月五日縦於蒲生野于時大皇諸王内臣及群臣皆

悉従焉

〈訓読文〉

天皇、蒲生野に遊獵したまふ時に、額田王が作る歌

あかねさす 紫野行き 標野行き 野守は見ずや 君が袖振る

皇太子の答へたまふ御歌

紫草の にほへる妹を 憎くあらば 人妻ゆゑに 我れ恋ひめやも

紀には「天皇の七年丁卯の夏五月五日に、蒲生野に縦獵す。

時に大皇弟、諸王、内臣また群臣、皆悉に従なり」といふ。

第一首の作者とされる額田王は主に斉明朝から天智朝に書けて活躍した女性の歌人であるが、詳しい出自は不明。『萬葉集』に全十二首の歌を残すが、『萬葉集』は出自や家系には触れていない。唯一、『日本書紀』天武天皇即位の条に

天皇、初め鏡王の女額田姫王を娶して、十市皇女を生ませり。

とあるのみである。が、此の記事から、始め天武天皇に嫁し、十市皇女を生んだ事がわかる。ただし、天武天皇の即位の記事では皇后鸕野皇女を筆頭に、妃として太田皇女・大江皇女・新田部皇女、夫人として氷上郎女、五百重郎女、大薙娘を挙げた後に記述されており、后としての身分が高かったとは考えにくい。しかも『萬葉集』には

額田王、近江天皇を思ひて作る歌一首

君待つと我が恋ひ居れば我が屋戸の簾動かし秋の野吹く

(巻4・四八八)

と、天智天皇を思う歌が見られることから、後に天智天皇に愛されたと推測される。西暦六七二年、壬申の乱で、天智天皇の皇子大友と大海人皇子(後の天武天皇)が争って、天武天皇が勝利を納めた後は、表舞台にはでなかったようである。ちなみに、大友皇子は額田王の娘、十市皇女で天武七年四月七日に、宮中で急病でなくなっている。その後、持統朝に弓削皇子との間で、亡き天武天皇を懐かしんで歌ったかと思われる

贈答歌がある。こうした事から、額田王は、その出自こそ不明だが、斉明朝以前に生まれて、持統朝まで、彼女は六十年以上の確かな人生を送ったとわかる。

歌を理解するために、簡単な語釈をしておきたい。

〈語釈〉

・蒲生野 近江国蒲生郡の野の意味で、現在の滋賀県近江八幡市・蒲生郡安土町付近の野。蒲は池や沼などに生えるがま科の多年草のこと。

・あかねさす 「紫」にかかる枕詞。紫草は根が綺麗な紫色をしており、染料に使われる。ここでは茜色のさし出る意で、紫草の根の色をおわしているらしい。「あかね」はアカネ科の蔓性多年生草本。根は太いひげ状で、多く群がり、黄赤色。赤色系の染料に用い、薬用にもした。『注釋』は、「紫は赤味を帯びているので、茜さすを紫の枕詞とした」とする。

・紫野 紫草の生えている野。題詞の蒲生野と同じ地。紫草はムラサキ科の多年生草本。夏に白色の小さな花をつける。太くて長い根は薬用とし、また、乾燥させて紫色の染料に用いた。本来、山野に自生する植物であるが、当時は、貴重なものとされ、あちこちで栽培された。

『釈注』は、この「紫野」も、「栽培と見られる」と解している。

・標野行き 標野は、紫を栽培している「紫野」に標を張った事から言う語で、前句の言い換え。「標」は「占め」で、立ち入り禁止のしるしであることから、この野が天皇の占有地である事を暗示している。

『行き』の繰り返しについて、『釈注』は「自由奔放に往き来するさまを表す」とする。

・野守 野の番人。「標野」の縁語か。

・袖振る 愛情を示す所作。「振る」は上の格助詞「が」に応じて連体

形で詠嘆がこもる。

・皇太子 大皇弟と同じ。天智天皇の弟の大海人皇子。

・明日香の宮 第四十天武天皇の皇居。「明日香の清御原の宮」ともいう。現在の奈良県高市郡明日香村内にのあった。

・紫草の 「にほふ」の枕詞。前歌の「あかねさす」に対して、同じく前歌の中の紫野の草の名を用いたもの。『釈注』は男女の掛け合いなどにおいては、相手の言葉を取り込んで応ずるのが作法であった」と言う。

「紫のにほへる」がひとまとまりになって、妹を修飾していると見られる。

・にほへる妹を 「にほふ」は一般的に、赤い色が美しく照り映える意。憎くあらば 好きでなかったら、の意。『釈注』は「憎し」は気に入らないの意で、今日のように強い憎悪の意はない」とする。

・人妻ゆゑに 人妻であるあなたゆゑに。「人妻」に手を出すことは固く禁じられていた。「に」をそえる時、くなのにという逆説の意を示すことが多い。(釈注)

・我れ恋ひめやも 「恋ふ」は好きな人または好ましい物と離れている時に、その対象に惹きつけられてしまう心の苦しみを表す。「やも」は反語。

・七年丁卯 天智七年。「丁卯」は今の『日本書紀』では「戊辰」。

・五月五日に 五月五日の狛は「薬狛」といい、鹿茸（鹿の袋角で薬用に供した）や薬草を採る宮廷の行樂的行事であった。

・大皇弟 題詞の皇太子に同じ。大海人皇子。

・内臣 内大臣に同じ。ここは藤原鎌足をいう。

右の語釈を踏まえて口語訳して見ると次のようになる。

〈訳〉

二〇番歌

（紫草の生える野、かわりのない人の立ち入りを禁じて標を張ってあるその野を行ったり来たりして、まあそんなことをなさっては、野の番人が見るではございませんか。あなたはそんなに袖をお振りになつたりして。）

二一番歌

紫草のように色あでやかな妹よ、あなたが、好きでなかったら、人妻と知りながら、私はどうしてあなたに心惹かれたりしましょうか。

〈内容への考察〉

この贈答歌は、二首だけを取り出すと、秘密の關係に或る男女の相聞歌として受け取れる。しかし、この二首は相聞の部ではなく、儀礼歌を中心に集められている雑歌の部に載せられている。この贈答歌の背景に、どのような物語があつたのだろうか。現在言われているのは次の二つの説である。

一

額田王と天武天皇と2人だけのあいだの恋の歌（相聞の歌）である。

二

遊獵を終えた後の、一日の幸を祝う宴における座興である。（雑歌群に分類される）

現在は、二の方が有力である。二を主張する理由としては、

1 「秘めたる恋」というには、天智七年（六六八）当時の二人は高齢すぎたのではないか。

2 「秘めたる恋」の歌が、どうして堂々と『萬葉集』に載せられたのか。

3 編纂上、恋の歌なら、相聞の部に収めるべきである（巻二など）のに、なぜ巻一の「雑歌」の部に収められているのか。  
が挙げられる。

神野富一氏は、「蒲生贈答歌」（『セミナー 万葉の歌人と作品』）で、「天皇、蒲生野に遊獵したまふ時に、額田王が作る歌」という題詞のどこにも「宴」の文字は見えない、という反論を取り上げるけれども、しかし、「題詞の書き方の型の問題にすぎない」と否定する。「讃岐の国の安益の郡に幸す時に、軍王が山を見て作る歌」や、「吉野の宮に幸す時に、柿本人麻呂が作る歌」などが、「……に……する時に、……の作る歌」といった型で示されていることをあげ、それらにも「宴」の文字は見えないけれども、実際は行幸先のやはり宴で披露されたと考えられるのと同様である、と述べている。

歌の持つ、相聞的情感にひかれることと、また、額田王と大海人皇子が子供までなした關係であることを考えると、宴の座興とするのには抵抗を覚えるけれども、「秘めたる恋」が『萬葉集』のしかも雑歌に載せられていることを考えると、少なくとも、編纂の段階では宴の歌を理解されていた野ではないかと思われる。

この贈答歌二首の成立事情とは別に、表現上の問題として、注目したいのは「紫野行き 標野行き」とある部分である。この表現について、神野氏は、「紫野行き」「標野行き」と、一種の繰り返し表現で、移動

感・躍動感を表している(前掲論文)と述べている。そこで、動詞の繰り返しに着目し、他に『萬葉集』で動詞の繰り返しがされている歌を、額田王の生きた時代を中心に、取り上げて検討してみたい。なお動詞の繰り返しを含む句に傍線を施した。

① 天皇の御製歌

籠もよ み籠持ち 堀串もよ み堀串持ち この岡に 葉摘ます子  
家告らせ 名告らさね そらみつ 大和の国は おしなべて 我こそ居  
れ しきなべて 我こそ居れ 我こそば 告らめ 家をも名をも

(巻一・二)

② 天皇、香具山に登りて望国したまふ時の御製歌

大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をす  
れば 国原は 煙立ち立つ 海原は かまめ立ち立つ うまし国そ 秋  
津島 大和の国は

(巻一・二)

③ 天皇、宇智の野に遊獵する時に、中皇命、間人連老に献らしむる歌

やすみしし 我が大君の 朝には 取り撫でたまひ 夕には い寄り立  
たしし みとらしの 梓の弓の 中弭の 音すなり 朝狩に 今立たす  
らし 夕狩に 今立たすらし みとらしの 梓の弓の 中弭の 音すな  
り

(巻一・三)

④ 天皇の御製歌

み吉野の 耳我の嶺に 時なくそ 雪は降りける 間なくそ 雨は降り  
ける その雪の 時なきがごと その雨の 間なきがごとく 隈もおち  
ず 思ひつつぞ来し その山道を

(巻一・二五)

⑤ 天皇の崩りましし時に、婦人の作る歌

うつせみし 神に堪へねば 離れ居て 朝嘆く君 離り居て 我が恋ふ

る君 玉ならば 手に巻き持ちて 衣ならば 脱く時もなく 我が恋ふ  
る 君そ昨夜 夢に見えつる

(巻二・一五〇)

①は雄略天皇の御製で、同じ句が繰り返されている。「おしなべて」「しきなべて」と同じ内容をことばを替えて、君臨している意を繰り返しており、歌謡的手法をそのまま残していると見られる。②も「立ち立つ」の繰り返したが、対象は国原の煙と海原のかまめであって、異なっている。そこには国と海を歌うことで、天皇の統治する地域の広がりと豊かさを表現している。これは③④も同様である。③は狩りが終日行われる様を、朝夕の対比に表現し、④は時間の区別無く、絶え間なく雪や雨が降り続く様が描写されている。②③④は繰り返しの表現が、時間や空間の広がりを把握させる技法となっている。一方、⑤はそうした時間や空間表現とは異なり、亡き天智天皇を思う心情が繰り返す事によって、強く表明される方法になっていて、方法としては①に近いと言えるだろう。こうした技法に比べた時、紫野・標野という言葉い換えと動詞の繰り返しは①⑤にむしろ近いと言えるだろう。但し、①⑤が状況を示す表現に「おしなべて」「しきなべて」、あるいは「離れ」「離り」というほぼ等価と言える表現語彙で言い換えているのと比べ、額田王作歌の場合は「紫野」という、いわば目に見える景色から来る表現を、「標野」という占有地というその土地の意義を示す表現に言い換えており、その方法はより高度だと言える。こうした繰り返しの技法を次の時代の人麻呂と比較してみた。

(人麻呂作品)

⑥ 吉野宮に幸でましし時、柿本朝臣人麻呂の作る歌

やすみしし 我が大君の きこしめす 天の下に 国はしも さはに  
あれども 山川の 清き河内と 御心を 吉野の国の 花散らふ 秋津

の野辺に 宮柱 太敷きませば ももしきの 大宮人は 舟並めて 朝  
川渡る 舟競ひ 夕川渡る この川の 絶ゆることなく この山の い  
や高知らず 水激く 滝の宮処は 見れど飽かぬかも (巻1・三二)

⑦ やすみしし 我が大君 神ながら 神さびせすと 吉野川 激つ河内  
に 高殿を 高知りまして 登り立ち 国見をせせば たたなはる青垣  
山 やまつみの 奉る御調と 春へには 花かざし持ち 秋立てば 黄  
葉かざせりへ一に云ふ「もみち葉かざし」 行き沿ふ 川の神も 大御  
食に 仕へ奉ると 上つ瀬に 鵜川を立ち 下つ瀬に 小網さし渡す

山川も 依りて仕ふる 神の御代かも (巻1・三七)  
⑧ 柿本朝臣人麻呂、石見国より妻を別れて上り来る時の歌二首(并せ  
て短歌)

石見の海 角の浦回を 浦なしと 人こそ見らめ 渴なしと(一)に云  
ふ「磯なしと」 人こそ見らめ よしゑやし 浦はなくとも よしゑや  
し 渴は(一)に云ふ「磯は」なくとも いさなとり 海辺をさしてに  
きたづの 荒磯の上に か青く生ふる 玉藻沖つ藻 朝はふる 風こそ  
寄せめ 夕はふる 波こそ来寄れ 波のむた か寄りかく寄る 玉藻な  
す 寄り寝し妹を(一)に云ふ「はしきよし 妹が手本を」 露霜の 置  
きてし来れば この道の 八十隈ごとに 万度 かへり見すれど いや  
遠に 里は離りぬ いや高に 山も越え来ぬ 夏草の 思ひしなえて  
偲ふらむ 妹が門見む なびけこの山 (巻2・一三二)

⑨ 水江の浦の島子を詠む一首  
春の日の 霞める時に 住吉の 岸に出て居て ……水江の 浦の島子  
が鰹釣り 鯛釣りほこり 七日まで 家にも来ずて 海境を 過ぎて漕  
ぎ行くに 海神の 神の女に たまさかに い漕ぎ向ひ 相とぶらひ  
言成りしかば かき結び 常世に至り 海神の 神の宮の 内のへの

妙なる殿に たづさはり ふたり入り居て 老いもせず 死にもせずし  
て 長き世に ありけるものを 世間の 愚か人の 我妹子に 告りて  
語らく しましくは 家に帰りて 父母に 事も告らひ 明日のごと  
我れは来なむと 言ひければ 妹が言へらく 常世辺に また帰り来て  
今のごと 逢はむとならば この櫛笥 開くなゆめと そこらくに  
堅めし言を 住吉に 帰り来りて 家見れど家も見かねて 里見れど  
あやしみと そこに思はく 家ゆ出でて 三年の間に 垣もなく 家失  
せめやと この箱を 開きて見れば もとのごと 家はあらむと 玉櫛  
笥 少し開くに白雲の 箱より出でて 常世辺に たなびきぬれば 立  
ち走り叫び袖振り 臥いまるび 足ずりしつ たちまちに 心消失せ  
ぬ 若くありし 肌も皺みぬ 黒くありし 髪も白けぬ ゆなゆなは  
息さへ絶えて 後つひに 命死にける 水江の 浦の島子が 家ところ  
見ゆ (巻十 一七四〇)

②は人麻呂の吉野讚歌と呼ばれるもので、⑥は川での船遊びが終日続く  
楽しい状況を朝夕の対比で描き、⑦は吉野山の春秋の景色の美しさを花  
と黄葉をかざす行為に託している。方法としては②③④に似ているけれ  
ども、②が空間、③④が時間を表しているのに対して、⑥は朝夕の時間  
だけでなく、船の「並べ」「競ふ」遊び方をも対象としており、⑦は春秋  
の時間に花・黄葉という異なる対象を歌っており、表現は複層的になっ  
ている。これは⑧の「風こそ寄せめ」「波こそ来寄れ」藻同様であるう。  
ただし、⑧の「浦はなくとも」「渴はなくとも」は石見の海岸に良い港が  
できる地形ではないことの強調で、「浦」「渴」の名詞の繰り返しは額田  
王の作歌方法に似るけれども、見える景から景の意味へとという言い換え  
に比べると単純と言わざるを得ない。ただし、石見の海の鄙びた状況は

「よしゑやし」とともに、単純な繰り返し返しであることが一層の侘びしさをかもしだして、作品の表現効果を上げていることも否めない。

なお、⑧の「か寄りかく寄る」に触れておきたい。同じ手法は人麻呂歌に、「夕星のか行き かく行き」(巻2・一九六) 朋見られ、動詞が示す行為が継続して行われる事を示している。しかもこうした方法は人麻呂歌集の次の作品だけでなく、奈良朝の作品にも継承されている。

⑩行き行きて 逢はぬ妹ゆゑ ひさかた の 天露霜に 濡れにけるかも (巻11・二三九五)

⑪恋ひ恋ひて 後も逢はむと 慰もる 心しなくは 生きてあらめやも (巻11・二九〇四)

⑫紫草を 草と別く別く 伏す鹿の野 はことにして 心は同じ (巻12・三〇九九)

⑬ 時に大伴宿禰家持が作る歌一首  
しなさがる 越に五年 住み住みて 立ち別れまぐ 惜しき宵かも (巻19・四二五〇)

いずれも神野氏が言われる、「動詞を多用して生動感を表す」方法であり、これは、『萬葉集』の特徴とも言つていいと思われる。但し、こうした方法において、動詞の繰り返しはいずれも接続助詞「て」が受けており、厳密には額田王の作品が言い切りであるのとは異なっている。連用中止法を重ねる額田王の作品は、「行く」行為を見ることに、人妻であることの後ろめたさが潜んでいるようにも思われる。

「あかねさす」「紫草の―」の恋歌を、行幸先の宴会の席で歌われた公的なものとされる裏づけには確固としたものがあるように見える。しかし、ロマン溢れる私的な歌としてとらえられてきたからこそ、この歌は今日まで親しまれてきたのではないだろうか。さまざまな人が、いろ

いろな解釈を見出し、今や小説やマンガとなり、今も人々が味わうことができるのが、この歌なのである。

#### 参考文献

- 伊藤博 『萬葉集積注 卷一』(一九九五年 集英社)  
沢瀉久孝 『萬葉集注釋 卷二』(一九五七年 中央公論社)  
土屋文明 『萬葉集私注』(一九五三年 筑摩書房)  
高木市之助他 『萬葉集一 日本古典文学大系』(一九五七年 岩波書店)  
伊藤博校注 『万葉集 上卷』(一九九二年 角川書店)  
伊藤博校注 『万葉集 下卷』(二〇〇二年 角川書店)  
神野富一 「蒲生野贈答歌」(『セミナー万葉の歌人と作品 第一冠 初期万葉の歌人たち』一九九九年五月 和泉書院)  
梶川信行 『創られた万葉の歌人——額田王——』(二〇〇〇年 六月はなわ新書)

最後に、この論文を書くにあたり、平舘先生に丁寧にご指導いただきました。この場を借りまして、深くお礼申し上げます。ありがとうございます。